
犬っころと騎士

柚唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬つころと騎士

【Nコード】

N5404T

【作者名】

柚唄

【あらすじ】

ツアーグラウンドの田舎の村に住んでいます。えっと、二年前に川が氾濫して、近くで遊んでいたらしいあたしは流されちゃいました。偶然にも同じ村の人に助けられたけど、あたしの腕には一匹の子犬。どういう経緯でこの子犬を抱いてるのはよく覚えてないけど、まあいいや。多分溺れて意識グチャグチャになったんだろうし。そのまま犬を飼いはじめて2年後、ぐらい。いきなりその犬が人間に――！？

犬っころ、光った（前書き）

この話は、作者が書いている「青いメガネのその少女」の脇役の設定を考えていたら、話が膨らんで調子に乗って書いたものです。

村の名前が出ないのは、上記の作品にもまだ名前は出ていないものの、ほんの少しだけ重要になるためです。

世界観は統一しておりますが、話はまったく違うので、単品でも楽しんでいただければ幸いです。

その脇役の話ではありません

犬っころ、光った

むかーしむかし、というほどでもない昔。五年前ぐらいに、地方の村から騎士になりたいとほざいた少年がいたそうな。

騎士といっても、どこか貴族様の家系にしかねない近衛騎士ではなく、王族直属の騎士のことだ。まあこの村の人なら、近衛騎士になる資格がある人がいそうなものなんだけど。

直属の騎士は力があれば誰でもなれるものの、農民出身の騎士などいない。

弱気で、いつもめそめそしてばかりだったその少年。前髪は目を覆い隠すほど長くて、それが一層少年を弱弱しくみせていたとか。体も細く、同い年の少年の中でも一番背が低かったとか。

そんな少年だったから、もちろんみんなからは無謀だ、無謀だと言われ続けた。けれども、その声には耳を傾けずに村を出て行ってしまったそうな。

弱気なあいつのことだし、すぐに半ベそかきながら帰ってくる、と村中が思っていたらしい。あ、でも少しの人は、森の熊に果敢にも挑んで死んじゃうんじゃないかって思ってたんだって。

話は少しズレるけど、この村はほとんどが森に囲まれている。東の森のはずれの方には、精霊様の力を駆使する魔女の住む家があり、その魔女はここらへんの精霊様の力を全て統べているらしい。……

あ、今のダジャレじゃないから！

精霊様の力というのは、雨を降らせたり、風を吹かせたりする感じの力らしい。精霊様の力ってどうなってるのか誰もわからないし、第一ここは田舎だから情報はそんなに伝わって来ないしね。

たまに地面が揺れることがあるけれど、それは魔女が怪しい実験をして、精霊様に怒られているのだそうだ。魔女はここらへんの精霊様の力に干渉してるから、怒られたはずみに地面が揺れちゃうらしい。

地面が揺れるのは遙か昔からの事だから、魔女は凄い長生きだという噂もある。あ、そういうえば、騎士になりたいと言った少年は魔女と友達だった、らしい。

同年の子供たちと遊んだ際、強気にも「僕、森の中に入れるよ！」と言いながら野生の動物だらけの森に入った拳句、東の森のはずれの魔女に会ったらしい。何があつたのかは言わなかったけれど、左頬に四本のひっかけ傷を作つて帰ってきて、その傷はミミズ腫れして跡が残つてるんだとか

話を戻そう。

その少年は帰つてこなかった。

そのまま一年経つても、少年は帰つてこないし、誰かが新しく騎士になつたという便りもなし。

そりゃあ、みんな無事でいてほしいとは思つてたけど、心の中ではすでに死んだんだと思つてたんだと。まあそうだよな。

でもあるとき、いつもお世話になっている行商人からこんな噂を聞いたらしい。

「なんかよお、農民の出身で、王女様も驚くぐれえの強えやつがいるらしいだで。今度、直属の騎士に任命されんじゃねえかつて噂もあるんだべ。髪は茶色、目も茶色、左頬に四本引つかかれたような古傷があるんだつてよお。それつてもしかして……」

村は歓喜に湧いた。と同時に、左頬に四本のひっかけ傷あつてよかったな、とか言つてたらしい。ちよつとその魔女に感謝したらしい。茶髪茶目の人とかわんさかいるし、それがなきや、少年のことだと判断するには根拠が足りなさすぎたから。

そして、二年前のこと。

王様直属の騎士となり、ある任務を承つたほどその少年は、一度、村の近くまで来ることになつたらしい。

任務というのが、精霊様の力を使つて悪さをしているやつを粛清するだとか何とかというもの。

精霊様の力を使える者は少ない。それゆえに重宝されることが多

いけれども、その悪さをする人みたいに力を悪用する人もいるらしい。……あれ？ 東の森の魔女はそれに入らないの？ あ、魔女はいたずらしてるだけか。

なんでも、その悪さをしてる人の力が結構強いらしく、色々なけりやならなかったらしい。色々って何かって聞かれてもあたしにはしつかり答えられませんよ。

まず、王女様も精霊様の力は使えるけど、妊娠してるからあまり疲れるのはよくないという点。じゃあ近衛騎士様はどうなの、って話なんだけど、近衛騎士って言うのはいつでも王様（もしくは王女様）の近くにいなけりやならないものだから、無理だったらしい。

それで、王族直属の騎士が派遣された。

……ん？ ちょっと待つて？ 東の森の魔女は精霊様に叱られるよね？ あれ？ 悪さをしてる奴は叱れないのかな……？ まあ魔女が叱られてるって言うのはあくまで噂だしね。まあいつか。

そして、騎士となった少年が派遣された理由。それは、精霊様の力を使える魔女にその任務を手伝うよう、王女様に言われたからなんだとか。

まあ理由は置いといて、少年が帰って来る日の村の広場にはほとんどの村人が集まり、その少年の帰郷をまだかまだかと待っていたときのこと。

地面が、揺れた。

いつもより大きく、それに慣れた村人たちも大慌てであつた。

古い家は壊れるわ、井戸は壊れるわ、少年のために準備した歓迎会もぐっちゃぐちゃに。川で遊んでいたと思われる女の子が、地面が揺れたお陰で氾濫した川に流されてるのを川沿いに住んでた村人が発見した。その女の子は村人だったのに、村の広場に集まらなかったのである。ちよつと叱られたらしい。あと、その女の子の腕には犬が大切そうに抱きかかえられていたらしい。

地面がいつもより揺れた件について、誰かが、「魔女がすつこいイタズラしたんだべ」と言った。そして誰かが「少年にいたずらしたんべ」と言った。

その言葉は、あながち嘘でもなかった。

少年は帰郷しなかった。まあ歓迎会なんてもうぐちゃぐちゃになってただけ。

次の日、どこでどうやって知らせを受けてどうやってこんな田舎まで一日で来たのかは知らないけど、別の直属騎士がやってきた。少年が、見つからなくなったらしい。

村人は、戦慄した。

川に流されたのではないかと考えて川を探した人もいれば、森の中を探した人もいた。けれども、いなかった。

ただ、わかるのは、少年が任務から逃げたと言うのではないという事。

その騎士が言うには、王女様は精霊様の力を借りて色々わかるらしい。……精霊様の力って、便利だね。

その後も少年は見つからず、みんながみんな死んだと思っていた。そして月日は過ぎ、今に至る。

そして、色々遠回りになりましたが。

この昔話に出てくる、少年を気にせずに川で遊んでいたと思われる女の子、それがあたしでございます。

てへっ。

いや、色々理由があつたんだよきつと！ うん！

まあ置いといて。置いとかせて頂きました。

今、足の小指の角に簞笥をぶつけて——じゃなくて、簞笥の角に足の小指をぶつけまして、痛みをこらえてしゃがんでいたんです。

叫ぶほど痛くなかったんですけど、なんか目がじんわりしてきまして……。

あ、泣く、と思ったたら、あたしが2年前川で流されてたときに抱きかかえていたという犬（名前はイズ）がペロリと目を舐めたんですよ。傍には涙を拭く布用意してくれてあります。……イズって賢いけど、なんでこんなに大きな布用意してんだよ……。

まあいいや、とりあえず頭撫でよう、と思った途端——イズの体が、発光した。

え、何々、え、精霊様がイズにでもバケてた！？

そんなあたしの考えも虚しく、イズのいた場所には——一人の、男。で、裸。

……イズが持ってきた布で大事なところが隠されてるのがラツキーです、とりあえず後ろに後退。……後ろに後退？ いや後ろに退がる。

その男——多分あたしと年齢近い——は上半身を露出させたまま、口を開いた。

「えっと、僕イズ、だよ」

犬っころ、喋った

上半身露出男。そいつは子供のような純粋な笑顔で言った。

「僕がやったわけじゃないけど、僕の、勝ちだね」

えへへ、と効果音が付きそうな台詞。

……あの、あたし全然理解してないんですけど。頭が追いつかないんですけど！

ちよつと待って？ この男……左頬に、四本のミミズ腫れ……あるえるえ？

「き、し……？」

あとさっきなんて言っただけ？ こいつイズって言わなかった？ まあとりあえず。

「え？ あ、うん？ ……どうしたの？ 体調悪い？ 僕の勝ちだけど、ここはほ——」

逃げる！

ガシッ。

く、首が閉まつ、うう！

「逃げるのなしって言ったよね！」

いや言ってますんよ！？ いつ言いました！？ とりあえず暴れて、襟首を掴んでるその手を振り離す。かわりに手首を掴まれた。それも必死に抜け出そうと頑張るけど……む、こいつ握力強し。

あたしが抵抗をやめると、家の中は静寂に包まれた。

上半身露出男から視線を受けてる、ような気がする！ 今下向いて顔見ないようにしてるんだけど、旋毛のあたりが熱いかもしれない。ていうか、さっきの布、しっかり腰に巻きついてるんですけど。いつの間に？

「……そ、つか。 やっぱり、そうだよな」

その男の声音はとても悲しいそうだな。な、なんですか、何がそうなんですか、てかあなた誰ですか、なんで発光したんですか、イズ

何処行つたのお前がイズなの、うがああああ頭の中が混乱と質問で溢れてる冷静になれない！

でもわかるのは、なんかこいつとあたし、知り合いみたい！

みたい、っていうのはね、その、誰にも言つてないけど、あたし記憶喪失あるんだよね！ 二年前に川に流された際の記憶がないのは、まあ仕方がないかもしれない。けれど、川の近くにいた記憶もない。それと。

毎日、農作業のお手伝いとか終わったあとにどっか行つてた記憶はあるのに、その何処かが思い出せない。

そこに行つてたのは誰も知らないみたいで、そういう質問もされないから、記憶喪失も言わないで済んだ。いや、なんとなく言いたくなかつたんだよね。なんとなく。

でもこの男……その何処かに関する知り合い、か？

男が鼻を噉る。……この噉り方。もしかして、泣いてる？ いい年した男が？

「申し訳ございません、今は全て忘れてください。顔を、上げていただいてもよろしいでしょうか。」

断る理由などない。さっきの弱気な声と違って、この声はなんだか力強い。逆らつても何かないと思うけど、なんか怖いのでとりあえず言葉に従つておそろおそろ顔を上げます。うう、なんか体熱い。緊張してるって言うか緊迫してるっていうか。

「私、王族直属騎士であり、この村出身のゼノ・ミレイブルです」
そこにいたのは、美少年でした。

この村出身の証とも言える、「ゼノ」という名前。

この村には、掟ではないにしろ、ある風習がある。それは、名前が二文字であり、後ろの一文字が「ノ」であるということ。小さいときに何でなの、って近所のおばあちゃんに聞いたけど、「知らないねえべ」と言われたのは今でも印象に残っている。

ゼノ・ミレイブルか……。誰だし。

用事とかで町に出かけるときは、名前の最後にこの村の名前を言うのがルールだけど、村の中なら大抵は付けない。

あ、そっか、王族直属か。多分、村の外でもこの村の名前をつけた名前は使ってないんだろうな……。名前って二回思っちゃった。ややこしや。

この村は訳ありだから、貴族様がいる所で名前言っちゃったら洒落になんないもんねー。

おう、意識が考え事に吞まれてた。

そうだよ、こいつ美少年だよ。上半身裸だけど！

左頬に四本のミミズ腫れがあるけど、多分これは例の、魔女に付けられたやつつか。爽やかな茶髪、澄んだ茶色の目。茶色の目なんかイズにそっくりだよ！ ってあ、イズ！

「訳がありまして、犬になっておりました」

どんな理由があれば犬になってるんだろうね……。

「あなたは覚えてらっしゃらないようですが、二年前、濁流の中私を離さないでいてくれてありがとうございました」

む。記憶喪失がバレてる……。いや、意識が朦朧としてたつてことを言いたいのかな？

「い、いえいえ……」

それと色々質問したいことがあるんですけど。でもさっきのは忘れてくださいって言われちゃったし。むう。

ああもうこんなこと忘れちゃいたい！ ていうかちょっと一人になって今の事考えたい！ えっと、何を言えばこの状況を打破できるか。

「え、っと、ミレイブル様は王宮の方に帰らなくてもいいのでしょうか？」

口から出てきたのは帰宅を催促する言葉。帰宅か。騎士ミレイブル様の故郷はここだから、帰宅っていったらこのことも指してしまうな。

「ああ、そうですね。多分王女様も気付かれたでしょうし……。今からでもここを出て行くとしたいのですが……」

ですが？ 何さ、何か不都合が？ あ、村のみんなに挨拶出来てないとか？

「他の村人に気付かれぬよう、あなたにも王宮に来て頂きたいのです」

ふむふむ、他の村のみんなに気付かれないように挨拶をし、て。う、ううん？ 頭の処理が追いつかない！ 一歩退がろうとするものの、そういえば手首を掴まれてた！ 状況を打破するどころか、自分を巻きこんでもつと悪くなつてしまいました！

「う、うううえ？ あ、何故気付かれないように？」

頭の中で辿りついた一つの質問。ドモリまくってしまいました。が。その理由は、現在は申し上げることがございません。王宮に着き次第、説明させて頂きたいと思うのですが……」

怪しい奴にはついて行くな知らない奴にはついて行くな。

町に出かける際によく大人に言われてたことを頭で繰り返す。この村は色々やばいから、他の人についていけばどうなるか知ったもんじゃない。

「あ、申し訳ございません。何故気付かれないように、という質問でした。私が生きてるなどと、みなさんも混乱するでしょう。それに、何があつたのかと訊かれると非常に答えにくいのです」

む。質問の意味を取り間違えられていた？ おつちよこちゃん。あたしが何で王宮に行かなきゃいけないか尋ねたのかとも思ったか。いや、尋ねますけど。あ、でも訊けないね。すでに言えないって言われちゃってるよ。

でも、でもさ。

「この村が懐かしいとか、家族に会いたいとか、は」

家族はいないかもしれない。この村にはよくいる、親のいない子供。あたしも家族はいない子です。でも村全体が家族のようなものです。あ、そりゃまあ嫌いな人もいるよ。

「一応犬の姿では色々見ましたので」

あ、そうだ、ミレイブル様はイズでした！ イズってよく村中散歩してたもんね。

「王宮に、来て頂けますか？」

「あの……あたしが処刑される、なんてことはもちろんありませんよね？」

「ええ！」

ビクツ。何故か元気よく返事をされました。てか声でかいですよミレイブル様。

「あ、あと。この村に、戻って来れますか、と」

あたしがそう尋ねると、ミレイブル様はとても真剣な顔になりました。す、すごい美少年だなあやっぱり。ちよっとドキドキするけど、この人あたし飼ってたんだ。とても複雑な気持ちになってドキドキが治まりましたよ。

「……ええ。あなたが望むなら、このゼノ・ミレイブル。必ず、何があっても、命をかけてあなたをこの村にお戻し致しますう」

いやいやいやいや！ 命かけないで下さい！ ていうかそういうのって王様とか王女様に誓うんじゃないですか！？ しかもその言い方、あたしがこの村に戻って来れないような感じがするじゃないですか！ やめて下さい！

犬っころ、叩いた

「着いて来て頂けますでしょうか？ 道中の命は、私が必ず保証いたします。」

期待と、申し訳なさを含んだ声音。強要してるとか、そういう感じはしない。でも、なんか怪しいじゃん？ 道中、ね。王宮に着いたらあたしは保証されないんですか！

「その、是非断りさせていただきたいのですが……。む、り、かな？」

あ、あはははは、とかわいた笑いしか出ないです。あはははは。「是非自身で決めて来て頂きたいのですが……。む、り、でしょうか？」

同じ調子で返されてしまった。無理、の所だけなんか弱気だった。ミレイブル様昔弱気だったんだっけ？ でも騎士となった今でも弱気って……。さっきの意味わからないこと行つてた時は終始弱気だったなあ。

「無理強いはしません。ただ、今すぐ決めていただきたいのです」
無理強いはしない？ え、つまりあたし拒否権あるってこと？

あ、そうなの。王宮に着き次第、招かれた、いや招かれると言うよりは連れて行かれた理由がわかるから、つまりはここに留まると理由が訊けないのが少し心残り。で、す、が！

「でしたら、申し訳ございませんが、お断りさせて頂きますね」

こう、イズがいきなり光ってミレイブル様になって、とかもう頭が色々パンクしてる、気がするようないような気がするんでね。ちよっと色々納得できないし、なんか村に帰ってこれないほどのことはイヤなもの。この村の生まれまら、この村で死ぬべし。この村の人は、犯罪とかしたらすぐに殺されちゃうほど色々やばいっすから。うわー箆笥にぶつけた小指の痛みもふっとんじやってる。あ、でも普通はこんだけ経てば痛まないか。

「そつか……」

いきなり弱気になり、敬語の抜けたミレイブル様。おいおい。その後に、申し訳ないような、怯えるような顔をして、

「ごめんなさいっ！」

と怯えるいじめられっ子のように、四本のミミズ腫れがある頬を少し歪ませ——頭に火花が散る。真っ白になってパチンと弾ける。首の後ろがちよつと痛いかもしれない。

てか、なんで叩^{はた}かれた！？

ん……。良い匂いがする……。お気に入りの麻袋……。なんか聞こえる……。？ ん……。すらすら……。川の音？ 綺麗なせせらぎだな……。ちよつと体が痛いかも……。
「つつう……」

寝返り打ったらゴリツって！ あたしの目は一気に覚めました！目の前に広がるは茶色。と、その隙間から洩れる光。体の下は何かゴリゴリしてるものがあつて、それでなんか狭い。身動き取くなつて、こんな状況ですから冷や汗出しました。

……これは一体何が？ イズはどこーあの子なら頭良い——あ。思い出したあああああ！ イズが騎士になって！ 叩かれたんだっ！

……騎士の名前が思い出せない。み、み、み、イズ？ じゃないあたしが付けた犬つころの名前。んー……。ミズ？ ……………絶対違うけど暫定的にミズということにしよう。

それであたしは今どうなってるんだ。囚われの身ですか？ 髪の毛がボサボサしてるよね絶対。体は痛いし、麻袋の匂いは好きだけど流石に入れられなくてもな！

囚われの身か……。色々バイかも。殺されちゃうかも。騎士にじゃなくて、こう、あいつらに。

あたしが騎士にされたのって手刀かな？ あいつら対策に、一応

村ではみんな手刀とか脛とか鳩尾はどことか教えてもらってるけれども。流石騎士です。何が何だかわかりませんでした。速かったっていうか、まあ場面が場面だったこともあるけど手刀する気配なかったから、全然対応出来ませんでした。

話がズレていた。むむん。えっと、体の下が痛いから、何かあるんだろうね。で、近くに綺麗なせせらぎがあるから……川辺？ 田畑の水引いてる川かな？ 麻袋の隙間から洩れる光的に、太陽は上らへん。つまりはお昼頃？ イズがミズ様になったのが朝のことで喉そんな乾いてないし、日にちは跨いでないってことでいいかな。あと蒸し暑い。

あたしの周りに騎士はいないのか！ てかどうして気絶させられたんだ。会話を思い出してみても、ご自身の判断で行くか行かないか決めて頂けるみたいなことしか言われ——うん？ うん？ 会話色々抜けてるけど……言い回しっていうか。

あ、れ？ あ、あれれれれ？ なんか、つながったぞ？

「できれば自分で行くと言って頂きたくて、無理なら無理矢理連れて行きます」

的な会話……？ う、嘘だっ！

でも確かに騎士様申し訳なさそうにしてた……今って強制連行されてるの？ でもあたし転がされてるよ？ ……騎士様、布を下半身に巻いただけの格好じゃなかったけ。

……うわぁそんなのが町で歩いてたら捕まる！

また話がズレた。

えっと、あたし、どうなってるのー？

ゴロゴロゴロゴロ。なんか転がされてるところ石っぽいね。そんなに痛い。うー。

あ、なんか足音聞こえる。え、だ、誰？ 騎士だよな？

「す、すいませーん出してください！ 逃げませんので！ ちょっと痛いんでー！」

頑張って叫ぶよーちゃんと聞こえますかー？

しかしそいつは返事をせずに近寄ってきます。……え、な、何。
しかも、耳をすませばなんか、ハアハアと喘ぐ声が……え？ 息、
切らしてます？ ……てか！ ……これ、人間じゃない！ 獣だ！
ちよつと獣臭い！ え！ 何！ あたし獣に食われて死んじゃうの
！？

ハアハアと喘ぎながら近寄ってくる獣。うわあああああちよ
つと待つて怖い怖いそれならいつそいきなり首飛ばされたりして死
にたい！ だって、苦しみながら死にたくないし、死ぬって言う恐
怖を味わいたくないじゃないか！

あたしには、わかる。……獣、もうあたしのすぐそこだ！

ゴロゴロゴロゴロ。転がるあたし。ゆっくり歩いて来る獣。……

こ、怖い！ 余裕持たれてる！

ゴロゴロゴロ。……こ、転がれない！ なんか、麻袋のどつか押さえ
つけられてます！

「うわあああああああああああああああ！」

叫ぶ叫びます叫ばなければ！ 我武者羅にゴロゴロします！
すると、押さえつけられてる感覚が消えた。いきなり消えたから
頭がいきなり地面に衝突。つつう……。

しかもなんか麻袋自体緩くなった？ 頭の上がスウスウする。…

…お？ お？ お！？

まさか、穴が開いた！？

足を尺取り虫のように使ってその穴から頭を出す。よいしょつと。
そしたら目の前には——白い、狼がおりました。

「ひっ！」

や、やばいやばいやばい！ 口にはなんか紐啜えてるし！ え、
何、あたしを袋から出して喜びを味わわせたせた上で食うのか！？
とりあえず麻袋から抜け出す。案の定下は石です。太陽に熱せら
れて熱いかも。いやそんなこと気にしてる場合ではない！ に、
逃げなければ！

「あ、起きたんですか？ 申し訳ございません、無理矢理やってし

まっ

後ろからのんきな騎士様の声が。……あ、あ、あの、あなたが連れてきた人が白い狼に食べられそうですよ！？　あたしの体と同じ大きさぐらいの狼ですよ！？　見えませんか！？

そんなあたしの怯えた視線に騎士様が気付いたのでしょうか。

「その狼は――僕の、相棒、です」

「おうんっ」

あ、あ、相棒ですか。狼もしつかりと、迫力と響きのある鳴き声で返事をしております。

「怖がらなくて、結構ですよ」

は、はあ。

あ、でも確かに何もされてない。麻袋だって食われてないし、大きな図形で紐だけを噛みちぎって……あたしが一方的に恐れてただけですか。

ペロツ。

ほっぺがヌルって！　お、狼に舐められた！　びっくりしました！

「あ、あの、この子の名前は」

「え、あ。……シロです」

……え、もしかして今名付けました？　名前、決めてなかったんですか！？

犬ところ、鍛えた

あたしの目の前におりますは、騎士様と白い、あたしと同じぐら
いの大きさの狼。騎士様のお名前は、失礼ながら忘れてしまいました。
た。ってことで呼びかけるときも騎士様でえつか。そして白い狼。

……なんか、今の今まで名前がなかったっぽいっていうか。

一応名前はシロ。先程付けられた名前でございます。白いからシ
ロって名付けたんだろーな。付けられた本人、いや本犬(?)も
不服そうにガルルル言っております。……お二人さん、相棒じゃな
かったんですか? っていうか相棒ってなんですかね。生き物と人
間で相棒って? どういうことなんだろうか。

いやはや、そういう諸々は置いときまして。

「あの……ここは、どこでしょうか?」

あ、なんかこう質問すると、後ろに「あたしは誰ですか?」って
付けたくなるね! なんか不思議。騎士様のような目上の人じゃな
かったらふざけて言ってたかも。

そして、質問したはいいものの、実は検討がついてます。ただね。
確認って言うか。

綺麗なせせらぎの流れる川。対岸といますか、向こう側が山な
のですよ。で、その山には少なからず見覚えがあります。あれです、
田畑に水を引いてる川から見える山、を右から見てる感じ。そんで
流れる川の方向は右から左。……ここって、もしかして。

「東の森のはずれです」

てへっ、あたしっいたら頭良い! 当てちゃった! ……当てちゃ
ったようわあああ!

魔女の住処ってここらへんですよね!? ここに来るまで森通っ
たんですよ!? どうやってここまで来たんですか!? 獣に襲
われませんでした!? 騎士様剣とか持ってませんじゃないですか!
大体、騎士様、体がすっごいひょろいんですよ。

上半身裸だったときに見ただけ。いや、ジロジロ見たわけじゃないけど、自然と目に入るじゃん？ そのときさ、見えちゃったんだよ。ちゃった。ここポイント。

痩せている部類に入る感じの体。けれど健康そうな体。騎士つて、そんな体でなれるの？ あつ、そうだ。騎士様犬だったんだ。鍛えてないから筋肉無くなっちゃったって感じかな？

おおーっと、話が逸れたー。なんだっけ。何考えてたっけ？ そうだ、どうやってここまで来たんですか！ そしてあたしはどうしてここに連れてこられたの！？

「無理矢理連れてきてしまつて申し訳ございません。実は、あ、魔女の家にも用があまりまして、ここに寄らせて頂きました」

心の中の質問に答えて下さいました。いや、ちよつと違うの。あたしを家に置いてきて下さればよかったじゃないですか。なのに、こんな。しかも麻袋に入れられてたつてどうということですか！ そんな気にしてないんですけど。

でも、訊いてもなんか無駄そう。……尋ねるの、やめとくか。

そ、それで、ま、魔女の家にも用つて何事でもありまするめか！？ するめか！？

いやそりゃ、騎士様と魔女は知り合いだとかとは聞いておりますが、大体騎士様左頬にやられてるでございましょう？ 仲が悪そうないメージがございますです。

「こちら、誠に勝手ながら、あなたの家から持ち出させていただいた握り飯です。ここでこれを食べながら待つていてください。私は今から魔女の家に行かせていただきます」

そうして、あたしの手には握り飯が乗せられました。ふあう。今から行くんですか。てつきりもう行つたのかと思いましたが。

まあちよい待て。少し提案があるんだが。

「あの、一度家に帰らせて頂いてもよろしいか？ 村に留まるのは諦めますので、旅の支度がしたいのです」

ほんと、諦めた。手刀受けちゃいましたしね。

「ああ、それは……。旅は、しませんでお気になさらず」
「とは？」

「私の存在に気付いた王女様が、他の騎士を呼んで迎えに来てくれるでしょう。ですので、大丈夫かと」

……そういうのは早めに言ってほしいものです。

「あと……村のみんなに、いつてきますを」

あたしがそう言えば、騎士様は申し訳なさそうな顔になって、言った。

「申し訳、ござ——」

「はい、わかっております。わがママを言ってしまい申し訳ございませんでした」

やっぱり無理ですよ。はいはい、わかっておりますよ……みんな、心配するじゃないか。心配掛けるのって、あたしが苦手としていることなんだよ。

「では、私は行きますので、こちらにシロを残していきますね」

……え。

いや、心遣いはありがたく頂戴いたします。騎士様は森の奥に行ってしまったわ……。え、そちらこそシロはいらないんですか！？ あ、森を抜けてきたのってシロがいたからか？ てか大体、シロってどこで育ったの？ なんか色々謎だらけなんですが。

そうしてあたしは川辺で、シロと二人きりになってしまったわけです。

そりゃあ、会話入りませんけど……せせらぎの音が聞こえて、綺麗でございますね。

ちよつと暑い、森に近づきたくない。けど陰に身を寄せたい。

あたしは、意を決して木陰に身を入れた！

……そしたら、シロが付いてきました。もしかして、シロ用心棒みたいな感じになつとるん？ ありがとなあ。

ひんやりと冷やされて、涼むその場所に腰を下ろす。寝っ転がって、木の葉によって少し狭くなった空を見上げた。吹き抜ける風も

冷たい。気持ちいい。

視界の端にシロを留めながら、耳をすます。木はそよぎ、川はせせらぐ。なんて風情のある………そこで今のあたしの言葉、かっこいい………

目を開ければ、空が。………外で寝てた？ ……じゃなかった。あたし、今外にいるんだったわ。

もそもそと起き上がれば、お腹がぐうぐうと音を立てた。そういえば朝何も食べてなかったっけ。ちょうど朝ご飯用意してたし。

「起きましたか？」

「はい………」

おう！？ 顔に出さずに驚いてみた。騎士様に声を掛けられて驚いたんじゃありませんよ？ 騎士様の格好に驚いたのです。

「そ、そちらは………」

「ああ、服や装備はもろもろ魔女の家に置いてありまして………引き取ってきたのです」

人の家に物を預ける程とは、結構仲がよろしかったのですね！

騎士様の格好といえば、いかにも騎士って感じの服（どう表現すればいいのかあたしにはわからない）に、なんかすごい剣。長い剣を腰に差して、二本の短い剣。

ところで、剣って重いですね？ ……筋肉のない騎士様、大丈

夫でしょうか？

ぐうぐう。

再びお腹が鳴る。

騎士様が、年下の妹に困ったちゃんだねえ、とでも言うように笑った。

ちなみに、あたしはお腹が鳴ることに羞恥を覚えたことはない。町に降りた際、町娘がお腹を鳴らして恥ずかしがっていたとき、まったく意味がわからなかった。お腹が減ることに何が悪いというの

だ。

村に帰ってきて近所のおばあちゃんに訊けば、「町娘だからねえ」と返された。意味わかんなかった。

で、年齢が上がっても考え続けた結果。一つ思ったのだ。町娘達是一日三食が普通だそうだ。だからお腹が鳴ると貧乏くさいと思われるのかなーとか考えた。まあ、これはあくまであたしの推測であって、実際どうなのかはわからないけど。

「握り飯、食べててください。私は少し、体を鍛えてきます」
はい、ではお言葉に甘えて。

体を鍛える、か。……やっぱ、騎士様自分の体力がないとでも考えたのかな？

まあいつか。川に入る騎士様を見ながら握り飯をぱくくんと。もぐもぐ。

少し水がほしいなと思いつつ、なんとなく空を見上げれば、寝る前とそんなに太陽は位置を変えていない。

木陰から出て川の近くへ。火にかけた方がいいのはわかるが、別に綺麗な水だし大丈夫であろう。

ごくごく。

そして飲んだ水は、とても苦かったような気がした。

犬っころ、中った

重い鎧を付けたまま、水の流れに逆らいつつ鍛錬する騎士様。
やっぱり鍛錬には慣れてるんだらうな……。一つ一つの動作が綺麗だ。

今日の気温はそれほど高くないものの、お昼頃に何か太陽の下でやるとしたら話は別。そりゃあ汗だつて掻く。

手を突き出せば汗が飛び散り、足を上げれば水が舞い上がる。……綺麗だな。

水を飲み終えて元の木陰に戻る。することもなく（逃げたかったけれど）両足を揃えて待っていていれば、一時間ぐらいして騎士様が帰ってきた。顔と髪の毛は川の水で洗ったらしい。

やっぱり美形だ。かつこいいのに弱気つてすごいな。少しキュンと来た。

騎士様が竹筒に川水をいれながら質問してくる。……その竹筒、あたしん家のじゃん？ 色々持ってきましたね……。

「お待たせして申し訳ございません。今から森の中を抜けて、タリ草原へ移動します。おそらくそこで他の騎士が待っていると思うので。体調はどうですか？」

タリ草原？ タリ草原って、魔女の家の向こうの山の向こうにあるやつ？ 村から行くには遠回りするしかないから、子供からしたら遊ぶには不向きな場所である。けれど、何かだっ広い場所が必要な時にはそこを使うこともあった。

暖かくなれば花を咲かすけど、井戸は掘れないわ川に来るには遠回りが山を越えなきゃいけないわで人が住むにはあまり適さないところである。

……あー、人目につかないほうがいいのかな？ 人目につかないように行動する、か。何するんだらうねー。でもそれならさっきの場所でもいいと思うんだよね。魔女の家の近くとか、誰も来る人い

ないし。みんな避けるから。

「大丈夫です」

と、答えた瞬間。お、お腹がああああああ！　ぴーごろごろ！
か、顔には出さないぞあたし！　偉い！　多分……生水飲んだせいだ！　お腹壊した！　大丈夫って言ったそばからなんという……。やっぱり油断して生水飲んじやだめだ。あたしのバカ！

「では行きましようか。疲れたらシロの体に乗れば大丈夫ですが……乗ったことのない人だと難しくて疲れやすいんですね」

そりやそうでしょ。走る獣の上に乗るんだ。体力がないとダメだし、慣れなきゃね。

でも少し懂れる。ちっちゃいときに近所のおばあちゃんから聞いたお話で、『草原をかける少女』というのがある。その話の中の一つの場面で、少女が広い草原を馬に乗って駆けてく場面である。

あたしの村は普通の村だから、馬だっているし、乗せてもらったこともある。けれど走らせたことはないし。

大体、シロの上に乗るとなると手綱とかがないじゃないか。どうやって乗るんだろうね。あともし今の状態で乗ったら色々漏らす気がする。そんなことには絶対しない！

歩き出した騎士の後ろを着いていく。……お腹ああああ！　お願い、もって！　お前はいい子だ！　お前ならできる！　……いや、無理！

「すいません、ちょっとお手洗いい行つてきてもいいですか？」

ていうかそこらへんの草の茂み。

「あ、は、はいどうぞ」

じゃあ行くか。

どうしよう！　シロについてきてほしいけどついてきてほしくない！　どうしようどうしよう！　森の中だからいつ獣に襲われるかわかんないけど、狼って臭いにも敏感だよね！？　どうしよう！

「ここらへんはシロの縄張りですので、安心してどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

用を足すのにもなんか色々気をつかれちゃってもう恥ずかしいです。狼って縄張りとか作るんだっけ？ 忘れちゃった。

とりあえず右へ。草木の茂る森の中は足袋じゃ歩きにくいな。とりあえず二十歩って所で。周りに誰もいないのは当たり前なんだけど、キョロキョロ見渡してからいざ！

……ふう。ホント、生水なんて飲むじゃなかった。

身近にあった手頃な草で後処理をして立ち上がる。左に戻ればいいんだ——って、あ！ キョロキョロした際にちよつと足場の向き変えた！

思い出せ！ 農民ナメんな！ 迷子になったことなんてないんだからっ！

無事に思い出し、左に二十歩いて元の道に戻れたあたしは、騎士様達と合流したのです。

「もしかして、生水飲んであたりました？」

……正解です。そういう質問は女性に配慮がないような気がしますが、流石です。

っていうか。

「騎士様も、そういう経験あるんですか？」

村のほとんどの人が、幼いころに生水は飲んじゃダメと注意されてるにもかかわらず、大丈夫だと考えて飲んであたっている。こんな歳にもなつてあたっているあたしだっていますし。いや、あたし生水あたらない方なんだよね。友達と遊んで、喉乾いたらみんなで普通に飲んだ。その度に結構あたる子とかいるんだけど、家に帰ってわかすのもめんどくさいしね。竹筒の中は基本からっぽにしていたから。

「ちっちゃい頃はしょっちゅうでしたね」

やはりか。

「騎士になつてからは、鍛えてるお陰かあたらなくなりましたけど……。あ、川の水しか飲むものが無いときとかに。先程も飲みましたが、私は大丈夫……で」

……あれ？　もしかして……？

「お腹、大丈夫ですか？」

「……すいません、ここで待ってて下さい」

あたった！　あたったよ騎士様！　犬になつてからは鍛えてないんだろ？　体だつてひよろひよろしてんじゃん！　なんで飲んだ！　お気の毒にと思いつつ、笑えて仕方がない。あははははは。

左に消えた騎士様。……あんな重そうな鎧を着たまま用を足すのか……大変そうだな。うん、絶対大変だよ。剣だつて重いしさ。てか脱げばいいのに。……でも結局は持つてることになるもんね！。ふらふらと（多分あたしより重度）戻ってきた騎士に同情の視線を送りつつ、再び足を動かす。今登り道だから、多分遠回りしてないんだろうな。

途中、あたし二回、騎士様四回の用足しタイムを使いつつ、草原に到着したのは太陽が沈む頃でした。

いやー疲れた。色々疲れた。けれど多分、一番疲れたのは騎士様だ。

騎士様は今、草原に這いつくばっている。倒れていると言っても等しい。

人間になりたてのひよろつちい体に無理をさせていたようだ。筋肉もないというのに、鎧をつけて剣を持つて。あたしより汗だくだく。……頼りない。

一番疲れてないのはシロ。けれど喉は渴いてるようなので、騎士様の竹筒を勝手に取つて飲ませてあげた。どうせ騎士様とあたしは飲みませんから！

騎士様の言う待ち人はまだいないようだ。ってことであたしも草原に大の字で寝っ転がる。その心は無心。ていうか色々考えたくない。山道を歩いてるときも無心でしたよ。

このタリ草原は誰も使っていないのにもかかわらず、草がボーボー、なんてことがない。一応誰かの領地なのだろうか？　それだったら子供達が余裕で領地の中で遊んでますよーって言いたいわ。

静かだなー……。

サクツサクツて聞こえる。……誰か来た！？ あ、他の騎士様！？
こうしちゃいらんないっ！

まず体を起き上がらせる。このとき、足音の鳴る方に背を向ける。
騎士様はすでに立ちあがっていた。あたしも慌てて立ちあがりま
す。

そして、下を向きます。ここ大事。

「よお、久しぶりだな」

「うん、久しぶりだね」

あ、騎士様の口調が弱気っ子だ。

目の前に立っているであろう騎士様。下を向いてれば敬意を表し
てるんだと思うってくれる。大丈夫だあたし。

……そこで気付いた。どうして騎士様——騎士様が二人いるから
ごちゃごちゃんなる。ひよろ騎士様とする——は騎士になれたのだ
ろう。いや、強さとか色々無視してさ。

だって。だってさ。あたし達って、ダメじゃん。

この村の人は。貴族にあまり顔を見せちゃダメなんじゃん。

犬っころ、移った

なんで騎士様は普通に顔見せてるんだろ。そりゃあさ、許可貰ったんだろよ。

でもさ、でもさ。ひよろ騎士様、いややっぱイズ騎士と呼ばう。は、さつき質問した通り、親がいないタイプのこの村の子供だったんでしょ？

だったら尚更ダメじゃない？

イズ騎士様はさ……勇者だな。顔見せて、殺されてないんだし。うんうん。

どついう経緯でー、とかしんないけどさ。よく見せる気になったねー……。てあれ。なんで村のみんなは止めなかったんだ？ 殺される可能性だつてあったしさ。……謎は深まるばかりですなあ。

「ミバ久しぶり。よくこつちがわかったね」

ニコニコ笑顔でイズ騎士様が語りかけます。ふむふむ、あの騎士はミバというのですね。下向いてるから顔見えないけど。……てか、貴族じゃん。呼び捨てか……。

イズ騎士様のモードが弱気モードです。いや、弱気じゃないけど口調が弱気な感じ。……正にいじめられっこのな。いじめられっ子でしたもんね。

「そうわかってるなら寝っ転がるんじゃねえよ。幸いその白い狼見つけてな。最初は逃げるか退治って思ったけど、良く見たら人がいるっぽいじゃねえの。狼の口の周りが血で真っ赤、なんてこともなかったからな」

おおうこれはこれは申し訳ない。白い狼の口の周りが真っ赤だったら映えるよねえ。

「で、こいつが？」

ミバ騎士様の視線がこつちへ向きます、向いてます。……多分。でも脳天が熱いんだよ。視線が当たってる気がしてならないんだよ。

てかあたし失礼してない？ よくわかんない。貴族とすれ違ったら礼する感じで頭下げてやり過ごしてたし。向き合ったことなんかありませんでしたし！

こいつが、ね。……う？ イズ騎士様の迎えじゃないのかい？

てかなんであたし付いてきてんだっけ？ あーあたし連れてくんだっけ。そうだった。てかあたしのこと聞いているんかい。……あれかな。女王様が使ってる便利な精霊様の力ってやつか。

「ま、そうだね」

「……ふーん？ おい、顔上げる」
びくつ。

自分でもわかるくらいに頭がびくってなったよ！ あたし動揺してるね！

「あー？ あー、お前の村とかそんなん気にしねえよ。道中下向いたままでいるつもりかよ。ほら、上げる」

……どうやら、事情はお知りのようで。まあそうだよー貴族さんですもんねー。

あたしは恐る恐る、ゆっくーりと顔を上げます。表情は固まっています。子供が悪さをして大人に捕まったときな感じの。スイカを種ごと食べて、お腹の中からスイカが生えてきちゃうと思ってた時な感じの。

「……行くか」

感想言われないでイズ騎士様の方を向きなおしました。……えー。そりゃあ感想言われたら言われたでそうだけどさ……。

かわいいって言われたら真っ赤になる自信あったよ。言われない自信あったけど。心の中でそうだったらいいなって思ってるけど、やっぱそういうのはお世辞認定。ブスって言われたらそれなりに傷つく。普通って言われたらそれはそれで傷つくかもな。

でも愛嬌のある顔、って言われたら喜んでたかも。あと人懐っこそうとか。

水面に映る自分の顔しか見たことないからねー。そんなにじっくり

も見ないし。

「そうだね」

そうか、行きますのですか。でもミバ騎士様は動かない。目を閉じて深呼吸だ。

「あ、確認するがそつちの狼もだよな？」

「うん、よろしく」

イズ騎士様、何を頼んでるんですか！ よろしく？ 何をだ。

動かないで下さいね、とイズ騎士様に言われました。え、何ですか。何があるんですか。これから王宮に向かって歩くんじゃないの……？

と思つた次の瞬間！

特に何も起こらなかった。

……うん？ でも何か違和感がある。なんだろ。なんて言うのかな……。

先程と変わらぬただっ広い草原。でもその向こうの景色は少し違うような感じがしないでもない。草の高さも少し高いような気がする。あと、急に雨の匂いするようになった。

「じゃ、行くか」

ミバ騎士様がさういうと後にイズ騎士様が続いて歩きます。ちょ、ま、置いて行くなし。

その後ろをシロが歩く。傍から見たら凄い光景なんだろうな！。

騎士が二人に農民の娘が一人に獣が一匹。……やべえよ。目的のわからない一行だよ。

「今、転移の魔法を使いました」

……転移の、魔法、ですか。

「魔法っていうのは精霊様の力です。なんとなくわかりますか？」

ええ、わかります。なんとなく。騎士様口調固！。どうやらあたし相手だと丁寧語。

転移の魔法か……通りで二年前もそんな早く調査が来たんだね。精霊様の力凄し。

いやしかし。疑問が残るな。転移の魔法が使えるなら村自体……いや、流石にそれは目立つか。じゃああの魔女の家の近くで迎えに来てもらえばよかったのに。わざわざタリ草原まで移動する必要はないはずだ。なんか目的あるんだろうな……。

「はい、なんとなく」

大体ここはどこだろ。王宮に行くんじゃないかな？　ここも草原ですが。

「そういう声なのか。ふーん」

……声の見定めをされました。なんだよ。なんだよ。しかもまたしてもふーん。感想もなし。いらないけどさ。

イズ騎士様はミバ騎士様とこそ話してるしさ。

ぐちよぐちよぐちよぐちよ。鳴り響く八つの足音。いや、響いてはいないね。

雨の匂いにする、と言ったように、ここは先程まで雨が降っていたようだ。下は野原。つまり土はぐちよぐちよ。

あたしは草鞋です。シロに至っては素足です。ていうか裸だよ。騎士様二人は靴を履いておられますが。あたしとシロはこんな。シロの白い綺麗な毛が茶色く……あたしも草鞋が気持ち悪うての。ウンチ踏み続けてる感じ。

でももちろんウンチの臭いはしません。新緑の匂いのみですね。

あ、あと雨の。

「あ。私達がタリ草原まで歩いた理由ですが……簡単に説明しますと、大雑把なんです」

……簡単に説明しすぎてよくわかりません。もう少し詳しく、ええ、少しでいいんで！

そんなあたしの視線に心を打たれたのか。そこらへんはあたしの預かり知らぬところですが、きっちり通じたようです。

「場所の細かい限定が出来ないんです。だからああいう広い所でやります」

……あー、そういうこと！　理解した。

精霊様の力——イズ騎士様が魔法って言ってたっけ——で魔法は、どうやら細かい指定ができないようだ。そうだね、こういう理屈なのかわかんないけど、少し転移する場所がずれて民家の中とかだったらヤバイよね。

……だからってなあ。なんとなく納得いかない。

理由は自分でもわかる。お腹があたったからだ。あんな、苦労をして……！ 森の中で何回も用足したよ。お陰で意識したらお腹減ってきた。

そういえばもうお腹治ってるな……。我ながら早いこと。

だが、騎士様はどうだろうか？

よろよろひよろひよろダメダメな体。重い装備もあるし。

……あたしはまだ治ってないに賭ける。

少し歩くと町が見えてきた。と、同時に。

王宮が、見えてきた。

まさに王族が住んでますよーって感じの立派な建物。……お金がかつてるなあ。

あたしなんて呼ばれたんだろう。その理由も後少しで解けますね。良いほうの理由だと祈りますが。あたしは常識人です。

目の前では相変わらず騎士様が喋っています。こそこそ声で。

あたしに何か聞かせたくないことがあるのはわかるんだけど、やっぱり虚しいものがある。嫌われてるみたいじゃないかー。あたしい、騎士様にい、いじめられてるう！

……こんなのあたしに似合わないわ。

さてさて。まあ似合うかに合わないかは置いてくか。あたしはどうなるんかね？

犬っころ、着いた

王宮は見えるものの、近くに城下町はない。……なんでだろう？

……あ。この野原、もしかして領地なんですか！？

あ、そっかそっか。もしかして転移の魔法用の領地？ ……タリ

草原もかな？ そうだとしたら、あたしたちは国の領地を無断で使
ってるわけになるんだけど。……犯罪だ！ 捕まるよ！

しかし気軽に質問できる訳もなく。……だって、騎士様お二人が
ずーっとこそそ声で喋ってんですもん。時折こちらを気にしなが
ら。さつきからずーっと。

居心地悪いー早く王宮着けー。でも王宮着いたら着いたで居心地
悪いことなりそー。農民には荷が重いべ。農民らすぐう、喋ってみ
んべ？ ……訛りすぎはあたしに似合わないね。てか農民ですから
作法とかわかりませんし？ ホント、女王様はあたしに何用なんで
しょうかね？ 大体わざわざ王宮まで行かなきゃなんのか？

おい待て。よく考えてみようぜお嬢ちゃん。キラーン。

何故イズ騎士様はあたしを連れ帰るんだろ？

だって、二年前の命令が継続、なんてことはないよね？ ね？

それに命令も受けてないでしょ？ だよな？ だよな！？

……はれれれれ？ あたしの思考回路が爆発しちゃうぞつ。頭ぼ
かーん！

や、やーめよ。考えるだけ無駄だわ……。

王宮に近づくにつれて建物が大きく見える。当たり前か。でも、
太陽はもう沈みかけてて、空は藍色に近くなってるから、建物の細
部は良く見えない

王宮はもちろんのこと、貴族の家なんて見たことない。そりゃあ、
村の近くにだって貴族の家はあるさ。そこらへんの領地の、えと…
…何様だっけ。まあ領主さまです。

けれど近付かないようにしてるからね。近付かないといけないこ

ともないし。

あの、周りを囲ってる黒っぱいのはなんだろ？ 一部分だけ上が山みたいになってるし。

近付くにつれてなんとなくわかってきた。その一部変なところ、多分門だ！ 多分！ そんなで黒っぱいのは柵か！ 建物の内側に人が立ってるんだよね。手になんか持ってるし。護身用の武器？

「うわっ！」

急に建物の内側の人——守衛さんっていうんだっけ——がこちらに向かつて発光した。発光した、のかな？ 手のあたりが急に光ったんだよね。

てか……手持ちの街灯、みたいな感じかな？

どうやら今の光でこちらの顔を確認したらしく、門もどきがゆっくりと開かれていく。暗いから、内側に開かれてるのか外側に開かれてるのかよくわからないな！。

そして門に到着。どうやら内側に開かれていたようで。

「お帰りなさいませ。ご無事で何よりです。そちらが……？」

守衛さんが首を伸ばしながら、騎士様お二人の後ろに隠れてるあたしを見てきます。……ん？ んん？ そちらが、ってことは、あたしのこと伝わってるの？ ……なんだし。

「はい、そうです。そしてこっちが使い魔です」

イズ騎士様がシロを指して言います。……相棒じゃなかったのか。そして守衛さんは建物から出てきた女の人——侍女ってやつかな？——に何か言つと、その侍女さんがあたし達を案内してくれました。

なっがい廊下を進む進む。……おっきな建物ですね。税金だらけだ！。

ここは動物厳禁じゃないんですかね？ シロが誰にも咎められることなくふっつーに歩いてるんですが。いいんですか？

あ、騎士様達の靴とか、シロの足は拭きました。てか拭いてくれました。

ただ、あたしの草鞋は泥が染み込んだやつてるもので。あたしは慣れてるからいいんだけど、今あたしの下にある赤い絨毯が汚れてしまうので、代えの物を用意してくれました。何これ。履きなれないです。歩きにくいです。

「あ」

躓いた。

これが草鞋なら咄嗟に反対側の足で踏みとどまるけど、履きなれないこの靴じゃ——！

「大丈夫？」

イズ騎士様が受け止めて下さいました。ふわわごめんなさい！「大丈夫です！　ありがとうございます！」

とりあえずお礼ですよね。お礼。

イズ騎士様の口調が弱気な感じであります。そしてこう、受け止めてくれたのにこう言うのもなんです！

体ひよろっ！　胸板ない！

農作業をしている村の男子よりひよろっ！　目茶目茶ひよろっ！　遅しさが足りないぞイズ君っ！

村の男子の体を実際に触ったことがある、なんてことはないけれどもね。それでも、服の上からでもひよろっ！　と思います。

暑い季節になると、ほとんどが上を脱ぐからね！。見慣れてるんだ。

ま、イズ騎士様に関しては、下が布だったからね……。流石に露出狂みたいじゃん？

どうやら目的地に着いたらしく、前の人達の足が止まりました。合計十個。侍女さん、騎士様二人、シロ。王宮を隅々まで見たい気持ちはあるけれども、緊張して無理なんです。無理無理。だって、小さい頃には少し懂れる、お姫様——王女様だけ——に会うんだよ？　と同時に、顔見られて殺されないかとひやひやしてます。つてことで下ばかり見てます。それと、すれ違う侍女さん達の視線も気になるのね。

ちらつと前を見てみますと、そこには扉がありました。……やっぱり大きい。

「ただいま戻りました。ミバセーダ・ミムスと、その他二名、そして使い魔が一匹です」

ふむふむ。ミバセーダ様と言うんですね。……イズ騎士様の名前思い出せん。

「どうぞ、入って」

中からは優しそうな女の人の声が。

「あれが女王様だから、失礼のないように」

イズ騎士様が扉の開く前にこっそり教えてくれます。ええわかっています。わかっておりますがね？　まずあたしは作法とかできませんから！　まあ、お行儀よくっていただけならやりますけどー。

門がゆっくりと開いて行きます。……下向いたままって、実は失礼でしょうか？　びくびくしながらもとりあえず顔を上げます。

侍女さんが女王様に例をして、こちらに例をして、来た方向へと帰って行きました。

前の二人の背が高いわけですが、その間から女王様を発見しました。……キレイだ。

キレイだ！　凄く！　あれで一児の母なんですわね！

金の装飾の着いた椅子に座って、優雅に微笑んです。その隣には、騎士様達と同じような格好をした男が。無表情です。……あ、近衛騎士かな？

前の二人が進み始めたのであたしも慌てて後ろに続きます。

扉と女王様の真ん中ぐらいまで進んで二人が膝を折りました。ちょ、ちょっと待って！　あたしも慌てて膝を折る——つもりだったけど多分傍からみたらすごい変だった。

シロを見れば恭しく頭を下げております。ほわ……。利口な狼だとは思ってたけど、まさかここまでとは。動物って侮れない。……

……あ、頭下げなきゃ！

「顔をあげて」

その言葉におそろおそろ顔をあげます。早速粗相してしまいました。

「お帰りなさいお二人とも。そしてゼノ。よくぞ生きていました。」

あーゼノか。ゼノ騎士様。

「私もまた陛下に会えて、至極うれしく思います」

その言葉に女王様は頬笑みで返すと、こちらを向きました。

「はじめまして。ナイラ・ツアーです。早速ですが、あなたに頼みたいことがあるんです」

女王様が名乗ったので、あたしも名乗ろうとしましたが遮られてしまいました。あれだね。農民の名前なんて聞く価値なんてないってやつか。……あ、本気でそう思ってるわけじゃないからね？ 急いでるのか、名前を訊くのを忘れたのか、はたまたは配慮か。

むしろ、用事が頼みごとで安心してる感じですが。

一介の農民に何の用だろうか？ はてはて？ それともあの村の人として？ でもそれならあたしじゃなくてもよかったよね？ などと考えていた呑気なあたしの頭は、次の一言で硬直するのです。

「ナトセの森の、魔女としての、あなたに」

……は？

犬っころ、走った

ナトセの森、って。あれだよね。村東のはずれらへんのことだよね。魔女？ 魔女ってあれか。イズ……、じゃなくてゼノ騎士様の友達且つほっぺにミミズ腫れ作った人。

あなた？ あなたって？ 夫とか、そういうのじゃのうて相手を指す言葉？

あた、し？

……えー？ いやいや、あたし精霊様に怒られたことないもん！ 会ったすらことないし！ 大体地面揺れてるのってどう説明するんだよー。最近もたまに揺れるし？

てか。……は？ は？ あたしい、意味わかんないんですけどお。。

「……どうなさいました？」

女王様が優しく微笑んで尋ねて来られます。どうなさいました、じゃなくてね？ あの、ね？ あたし魔女じゃなんだよおおおおおおおおお！ と、一国の頂点に言えるはずもなく……ていうか。いや、心当たりっていうか。ね？ ま、あり得ないとは、思ってるけど？ もつしかしたら、ってのがあるじゃん？ きつとあり得ないべ？ な？

「記憶が、なくなっております」

ゼノ騎士様が、ポツリと言った。いや、みんなに聞こえるけど。

……はれ？ はれれれれ？ え、え、えーっど？ あたしの、ことだよ？

「え、あ——」

混乱した頭で、とりあえず何かを言おうとして——柔らかく、そして温かい何かで後頭部をやられ。何か、懐かしさと既視感を感じつつ、あたしの意識は消えたのです。

パチツと目が覚め、目の前に映るは薄暗い天井。……ここどこ？
白そうな天井だ。こんな天井がある家、村のどこにもないんだ
ど？

村のどこにもない。……あ、れ？ あたしさつきまで王宮にいな
かった？ えっと、女王様があたしをま、じゃなくて。

「あれーなんにもおもいだせないぞー！」

少々棒ながらも、しらじらしく呟いてみた。……あたし、ホント
になんにも覚えてないよっ！ きつと覚えてないよ！ 覚えてない
ことを希望します、ええ。

とりあえず体を起き上がらせて状況を確認いたします。

月明かりが洩れて部屋の中は真っ暗ではありませんので余裕で見
えます。ま、村育ちのあたしには慣れたものですよ。

そして薄暗い中、とても感激した。

やばい……！ この一部屋、あたしの家の大きさと同じぐらいだ！

何ここ、豪華！ ここって多分王宮だよな？ うわーやつぱ金持
ちって違うね！ てかあたしが乗ってるのってなんだ？ あ、ベッ
トってやつ？ なにこれ柔らかい！ 地面とは違う！ 柔らかい！

柔らかい！ とにかく柔らかい！

調子に乗ってその上で少し跳ねつつ、布——いや、多分布団って
いうやつ——を触ってみる。ふむふむ、布とは違う手触り……。な
んだこれ、中に空気でも入ってるのかな？ あと綿とかそういうの。
やつぱい高級すぎる！ ま、じゃなくてなんにも覚えてないけど色
んな事忘れて興奮しちゃいますよ、ええ！

なんとなく右手を右に、左手を左に下ろして——違和感に気が付
いた。

右は柔らかいベットに良い感じの布団。だが、何か、左が違う。

柔らかい。柔らかいの、だ、が。なんかもふもふしてる。そんで
温かい。

え、何？

何か嫌な予感がするので、ゆっくーりと首を回せば。

白い、獣がいた。てかシロがいた。

「ほわっ」

そこにシロがいたことに驚くとともに、それに気が付かなかった自分に驚く。え、村出身のこのクンクンさせて、シロの匂いを嗅ぐ。別に変態じゃないんだからね！

……獣臭が、しない！

そういえばシロと川辺で会ったときも獣臭しなかったなーと思い返しつつ、シロってなんか違うな、と考える。なんで獣臭せんのか？シロはどうやら寝ていたらしい。ま、あたしが触ったことよって起きてしまったようだけれども。ごめんね。もうちょっと寝てていいよ……。目、冴えた感じ？

シロが伏せていた体を起き上がらせると、上半身だけを起き上がらせているあたしよりは高くなる。あ、なんか狼に食べられるときってこんな感じなのかな。なんか食われそうな感じ。比喻じゃなくて、ガチ獲物として食われる感じ。

クーンとシロが鳴いて、顔をペロペロ舐められた。

ぬ、ぬう甘えるでない。いや、別に舐められることに抵抗は感じないけれども、シロ図体でかいから！　なんかちよつと食べられる感じ！

だってほら、舐められるとかは、たまにイズに舐められ——あ。

……ゼノ騎士様の言葉からするに、イズになってた間の記憶ってあるっぽいよね……。……同じ村の年頃の娘を舐めるってどうよ。まあ年頃の娘と言うには耳年増ですけれども。

そして呑気にそんなことを考えてるあたしを舐めながら、イズがクーンと鳴いたかと思うと——なんか、襟首啜えられた。え？　え？　ふっ、わあ！？

「いつ！」

そのまま宙返りを促されるように投げられ、て？　痛いのは嫌ですから必死にもがいてシロの背中へと着地。う、わ、あ、こ、こわか、た……。

あたしの足に絡まった布団を回収しつつ、自分の服装が変わっていることに気が付く。

……これは、所謂貴族のお嬢ちゃんを着るドレスってやつだろうか？ 農民ならず、町娘が着る服よりはとも豪華な感じがする服……あたしが普通の農民ならどうだろう。よろこんでたのかな？ うーんわからん。悪政な感じの領民だったらむしろ嫌悪するのかな？ それでも一部は憧れるかもね？

あたしの村の子でも憧れはもつかもされない。でも、幼い間だけどちらかというと、関わりたくない感じがするから、やっぱりなんか嫌な感じ。

だから、なんかこの服あたし嫌だわ。似合わないのはもちろんのことだし、大体あたしの服どこ？ いつ着替えたっけ！？ え、こっちは本当に覚えてない。

シロの背中に乗ったまま部屋の中をキョロキョロしつつ、何かもそもそと動くシロから降り下ろされないよう、両手でシロの毛を掴む。ちなみに布団は手と体の間です。

毛が抜けないかとヒヤヒヤしつつ、痛くしてごめんねと心の中で謝りつつ、シロが何をしているのか見てみれば。

なんか、窓を開けていた。

大きな窓。村では見たことのないガラス張り。その大きさは、シロでも通れるほど。

うん。通れる。

シロが、その空いた窓から、飛んだ！

もちろんその背中にはあたしがあああああああ！

「ふいっ！」

あたしの喉からは掠れた声しか出ない。うわあああなんだこれえええええええしかも結構高い真つ逆さまに近いいいいい！

シロは壁を蹴ってるっばいうわあああああああああああああ！

あ、あ、っはは！

白い狼の背中に乗って駆ける少女ってカッコいいね！ あ、あつ

風邪が髪の毛を逆立て、浮遊感にお腹が！ お腹が！

着地の衝撃が腰にドクンと来たお陰でシロの背中に這いつくばる。

こ、腰が！

夜明け前なのか薄暗い王宮を走り抜け、あの柵までたどり着き――
跳んだ。

ああ、これが狼の跳躍力なり。

やべえええええええぎゃああああ！

今さっきで腰が痛いっていうのにもう！ ていうかシロさんあなたは何がしたいんですか！ うわああああ！

あたしの心の声は届かず、シロは疾走します。うとう何処行くの！
風のごとく、王宮の近くの草原を駆け抜けていたシロが急ブレーキをかけた。

体がそれに逆らえるはずもなく、前へと体をズレそうになるので慌てて毛を握りしめます。

風のお陰で前をよく見てなかったけど、その風もないのでおそろおそろ前を見れば。

「どこ行くつもりかな？ いや、連れていく、つもりかな？ イズ」
ゼノ騎士様が、何か異様な雰囲気醸し出してどこに立っており
ました。

あたしの頭はまだ混乱中です。ええ、色々。

ただ、この時点で一つ浮かんだ疑問というのは――いやいや、イズって、あなたのことでしょう？

犬っころ、逃げた（前書き）

お気に入り登録、評価、ありがとうございます。とてもうれしい限りです。

犬っころ、逃げた

唸り声を出してゼノ騎士様を牽制するシロ。いや、イズ？ いやシロだべ。

ねえねえちよつと待ってよ。あたし色々理解できないよ！

イズが人間になるわ、それが騎士だったわ、しかも王宮に連れてこられるわ、ナトセの森の魔女だって言われるわ、窓から跳ぶわでもうやばいよ。

それで、シロがイズって？ おいおい冗談きついでお嬢ちゃん？
じゃなくて騎士様？

しかも相棒じゃなかったの？ え、なに喧嘩中？ あたし関わりたくないよ！

ゆっくりと近づいてくるゼノ騎士様。そして後退するシロ、の上にあたし。

「止まるんだ」

その言葉に従わないシロ。いやいや相手は騎士様だよ！ 従おうよ！ シロに念じてみるけどあたしはそんな能力を持ってないのであります。シロには効きません。

あれ、言葉を理解できるはず、だよな？ ……記憶力に自信はありませんが、あれ？

「もう一度いいます。止まりなさい」

止まらないシロ。止まるべしだよシロ！ まあ抜け出すようにしたところからおかしいんですけどね！ ……でもこれがいいことだと思っただよ。なんでだろ。

「ただいまより、武力行使を行います」

そして突っ込んでくる騎士さあああああああああああああ
あ！ ま！

シロが急に走り出すから振り落とされるかと思ったあああああああ
あ！ ホント申し訳ないけど白い毛を思いつきり引っ張らせてもら

って足もがっちりと胴体を締め付けるような感じで！ ごめんね一部禿げるかもしれないからまじごめんね！

普通の声でしゃべってたから、ゼノ騎士様とあたしたちの距離はそんななくて、だから騎士様が突っ込んできた瞬間右に走ったシロ。結構すれすれだったかもしれない！

おそろおそろ後ろを振り返ってみれば、こちらに走ってくるゼノ騎士様。……さすがに城の足にはついて来れないようですね。

あたしの心の中に罪悪感はない。自分でも不思議だ。騎士様に逆らっているのにな。

再び前を見据え、シロの走りに身を任せる。

一直線に進んでいくシロ。ほんとどこ行くの！

「おいおいどこ行くんだよ……」

突如目の前に人が現れる。それに反応して素早く左へ曲がるシロ。ふわまた振り落とされるかと思ったよ！ 今のは誰だったんだろてか、今さ、急に現れたよね！

先ほどより早い段階で後ろを見ても、夜目ではわかりにくい。田舎者ですから、普通の人よりは優れてるつもりなだけだな！

そういえばゼノ騎士様ってどうして判断できたんだろ？ ……まあ一日一緒にいたしね。

走って、走って、走って。

着いたのは、一つの屋敷だった。シロの意図がわからないよ！いかにも立派な貴族やってます、という屋敷。

シロに流されるままにここまで逃げてきちゃったけれども、何故逃げてきたんだこの犬っころめ！ けれどどこかそれに納得してる自分がいるのも嫌だ。

どうやらこの門にはアレがいらないらしい。えっと、なんていうだっけ。昨日、っていうか夕方頃には思い出せたはずなのに！ えっと……門番？

そしたらまたシロが他のところへと歩き始めた。ここじゃないんかい。

屋敷の外を周るように着いたのが、先ほどの裏側。

王宮と違って柵ではなく、塀があつて、石垣でできているようだ。そこにある、小さな門。人ひとり通れる感じの門。これは柵みたいな感じ。

どうやらそこから中に入れるらしい。……シロ、お前この屋敷の関係者か？　なんでこんなに詳しいの？　この屋敷にはいるつばいんだけど、あたしとしてはやだな……。つまりは侵入じゃん？　貴族遠ざけ教育なあたしにとっては抵抗が……。

シロが体をくねらせる。降りるように催促されているらしい。

ありがと、と言いながら体から降りれば、ちよつとだけふらついた。身をかがませて触れてみれば、どうやら鍵がかかっているらしい。入れなねえだ！

と、温かいものが背中を感じられた。

シロが触ってきたつばい。肉球あつたかいねー。どうした、と訊けば、前足で自分の首を叩いた。……？　えっと、首を絞める？　いえ、冗談です。導かれるままにシロの首を探れば、そこには首輪が。

首輪が……。村では放し飼いが普通だからな。見るのは初めてかもしれない。でも見たことあるような気もするようないような？　その首輪を見れば、小さい箱が付いている。箱を開けつつ、一つ後悔すべきことを思い出した。――首輪があるんだったら、首輪引っ張ってりゃよかったじゃん。

ああやつて、毛を引っ張ることもなかったつて。

いやいやよくねえよ、と自分で訂正する。そしたら首が絞まっちゃうもんね！

箱の中には一つの輪に通されたいくつかの鍵があつた。

……あー！　これのどれかが門の鍵つてわけだ！　よし、頑張るぞ！

運よく四番目の鍵で開いた小さな門をくぐり、そのあとをシロが続く。……シロ、お前は どうして そんなものを持っていたんだ。

あたしたちが今いる場所は植物だらけだ。といっても荒れてるわけではなく、花が咲くやつばかりか。なんかいい匂い。タリ草原とはまた違った感じ。

「あ」

上から声がかかると同時に、光によって照らされるあたしたち。
げ、人！ やばい人に気づかなかった！ これはやんつばいよ！
反応して相手の方見ちゃった！ 顔見られちゃったよ！ 見られる前に逃げるべしなのに！

「み、みみ見つけましたよ！ ミハエル様！」

……は？

「旦那様、こんな時間に申し訳ございません」

コリンズ家当主、マイルズ・コリンズは不機嫌だった。

「ミハエル様、が、帰宅なされました」

家の役目を果たさない長男が失踪してから三年が過ぎ、突然戻ってきたのだという。

これで他の家に噂されている「長男が死んだ」ということを止めることができるが、それと同時に今更なぜ戻ってきた、という気持ちも多々あったのだ。

部屋に通せ、と言えば、長年仕えている執事は気まずそうにできないという。

理由を尋ねても答えないので苛立ちながら息子が待っている部屋を訪れる。

そこには、確かに『ミハエル』がいた。

ミハエルという、身代わりにふさわしい、娘が。

多分、『村』の子供であろう。

ミハエルがいなくなったときは、確かに『村』の子供を連れてきて身代わりにする手段があったが、それでは他の家の人にバレてし

まう。だからそれは実行に移されなかったが。

前を見る、マイルズ。

どうやって『村』から出てきたのかはわからないし、その点に関しては『村』を警備している奴らに罰則を与えるとして。

前を見る、マイルズ。

今日の前には『ミハエル』がいる。本物ではないし、男でもないが、千載一遇のチャンスだ。お飾り程度でも信用は取り戻せるぞ。

その娘のためでもあるんだ。今ここで『ミハエル』にしなければ、殺すことになるぞ？　なあマイルズ。やれ、やってしまえ。

「よく帰ってきたな、ミハエル」

その一言に使用人どもが安堵の息を吐くのが目に見えてわかった。娘をミハエルと認識するかどうか、皆が不安だったのだらう。

まあ、主人を騙しているわけでもあるしな。……騙してるわけでもないか。

けれども背徳感があつたことには間違いないだらう。

「え、あ——」

「ミハエル」

さきほどより少し大きな声で名前を呼べば、気まずそうに黙った。「今日はもうゆっくり休め。夜明けまで時間は少ないが、少しでも休息を取るといい」

あとは侍女たちに任せて部屋を出て、執事のジュリアンを呼ぶ。

「ミハエル用に服を仕立てろ。胸もないようだから平気だらう」

息子のミハエルの服では少々大きすぎるようだからな。

さあ、明日からまたこの家を良くしようじゃないか、マイルズ・コリンズ。

犬っころ、眠った

あたしがその『ミハエル』ではないのが重々承知の上でのミハエル呼び。どうやらあたしを利用するつもりらしい。しかもあの村の人だというのもわかっていようだ。何がしたいのやら。まあ、貴族に見つかって殺されていないだけでもマシか。

侍女とやらにミハエルの部屋に案内されながら、シロはどこにいるのだろうか考える。他の人に質問する勇気なんてないけど、やはりシロのことは心配だし。庭とかにいるのかな？

部屋に通されて体周りをあちこち触られた。え、なに、なんですか。

失礼します、と言われ、ひもを使ってあちこち当てられる。長さを測ってるっぽいんだけど、どうしてそんなことするんだこのやろー！ あ、そのミハエルって人、身長とかいろいろ違うから工夫しなきゃいけないとか？

話からするに服を作るっぽいんだけど……。対して大きさに違いがなきゃその服を着続ける農民とは大違いですなー。どうやらその人の体に合わせて作るらしい。

しかし……。この部屋……！

なんか、お嬢様な感じがしない。

貴族つてとにかく装飾がすごい服、建物つてイメージあるし。廊下だって赤い絨毯も敷いてあった。きっと部屋もきらびやかだと思っただけで、これは予想外でした。

だって王宮での部屋も結構豪華だった気がする。暗かったから色とかはよくは覚えてないけれど。

ミハエルって人は落ち着いた人なのか？ まあこういう部屋の方が豪華な部屋よりは個人的に落ち着けるだろう。それでも田舎のぼる家よりは落ち着けないだろうな。ぼろくたって、一人で暮らしてたって、あそこは温かみがあるからね。

髪の毛は、この家の主と同じ色だろうか？ そしたら金髪のはずだ。

あたしの髪色は茶色。いうなればゼノ騎士様と同じ色だ。つまりありふれた色である。まあそれは置いて、髪色はどうするのだろうか？ あ、実は母親が別色とかでミハエルも茶髪とか？ まあそれだろうか。

ふあゝ……。ねむうゝ。

本能には逆らえず、声を漏らして欠伸をすると侍女さんが止まった。あ、何か悪いことしちゃった？ 欠伸ってしちゃだめなんですか？

「お疲れでしょうか？」

「え、いや、少し……」

正直に答えると、侍女さんがあたしの後ろに立っていたほかの侍女さんたちへと頷く。

へ？ と思い、目線を追うように後ろを振り向くと、なんかゆっくり迫ってきた。

ちょ、っと、なんか怖いですよ！？

「湯浴み場へご案内させていただきます」

……う？ ゆあみ？ ゆあみつてなんですか？ 場？

……湯、あみ。湯網？ ……料理場か！ ……料理場に案内する

って？ ……色々おかしくない？ 欠伸したら料理場って。まあ貴族のことなんてよくわからないけれども……。

で。

そうやら湯網ではなく湯あみ……浴び？ みたいなことらしい。

促されるに、お湯につかるらしい。……なんじゃそら。

湯船に入る前に体を洗わないといけないらしい。はあ、それだけでーじゃん？ とりあえず服を脱ごうと思ったけど、侍女さんが目の前に立ちつばなし。……え、と。あ、うん、このまま脱げと。

脱ぎはじめると侍女さんも脱ぎ始めた。ちょっ、一緒に入るん？

脱ぎ終わると床がつるつるのところへ移動。つるつるの床とかはじめてだ。なにこれたのし——ぷてんっ。
滑った。

……うぐう。しかも何今の音。すっげーいい音だったよね。だよ
ね？　なんかハリがありそうな音だよ。そして膝が痛いよ。

侍女さんが心配してかける声に大丈夫だと返す。

そして湯がたまっている窪み？　にゆっくり入れられる。ちよつ
と熱いんだけど。

腕をやさしく掴まれ、布でこすられはじめる。……え、自分で洗
えますけど！　え、なんですか、貴族って他の人に洗ってもらうん
ですか！？　どんだけ他人任せなんだ！　え、え、ちょ、そこ洗う
な、うう！

あたしに文句を言う勇氣があるはずもなく、色々洗われました。

……こつちにも恥があつてだな。そりゃ生かしてもらつてるだけで
もありがたいですけどー！

抵抗したいけど抵抗できないので開き直って意識を別のところに
集中する。

ミハエル、か。ミハエルちゃん、ね。その子が何故この家にいな
いのか気になるところだけど。一番妥当なのが死んだ、だよ。……
ん？　いやいや違うよ。そういえば昨日おっさんがよく帰ってき
たーみたいなこと言っただけ？　んであの人がミハエルちゃん
のお父さんかな？　それでこの家の主人。帰ってきた、か。貴族の
お嬢様が遠出？　うーんよくわかんないなー。

そんで、ただの村娘……でもないけど村娘に身代わりを努めさせ
るかね？　……させるか。でもわざわざこの村人使うかなー。むし
ろこの村だから使うんだよねーうん。まったく、考えてもきりがな
いよなー。それはわかってるんだけど、ほんと、頭パンクしちゃっ
てるからさ。わかることだけでも考えていかないとダメだよ。魔女
とかそんなこと、あたし一切合切忘れるから。いちにのさん、はい
忘れた。もうあたしは思い出さないぞ！

頭に変なものを塗られたりしたものの、やっと湯浴みの時間は終了し、髪の毛の水分をできるだけ抜き取り、寝間着と思われるものを身につけられ、また部屋へ。窓の外を見れば、外は橙色。……そう、朝焼けであります。

そうだよ。そうなんだよなー。来たとき深夜だったんだよ。もう朝方だよーん。

侍女さんたちの顔も疲労が伺えます。ごめんなさい。

部屋に戻ると椅子に座らされた。えーまだ寝ないの？ 結構眠いんだけど。

「決して動かないでくださいね」

はい。あたしはいい子だもん。動きません。

どうやら髪を梳いているらしい。髪を一房とられては、また肩に戻る。その音と、適度な逃避への刺激があたしを夢へと誘う。頭がふわわーっとする。

けれどそれは、変な音がしてから一気に醒めた。

ジヨキツ。

……何この音。それと同時に首の後ろがスースーする。

何があつたのかと思い、頭を動かすと再度注意された。え、あ、はい。でも、え、え？

ジヨキツ。

今度は右側らへんがスースーする。

ジヨキツジヨキツ。

今度は左側。そして頭がどんどん軽くなっていく。なんとなく風の通りもよくなったような気がするようないような。

ちよっと目に無理をして、頭を動かさないように下を見れば。

一面の金。というわけでもないけど金色が落ちていた。

それはまるで、髪の毛のよう。え、髪の毛？ 実際に髪の毛だよ。

よう、じゃなくて髪の毛だよ。……あたしの髪の毛は茶色だよ？

じゃあこれあたしのじゃないよね？ だったらどうなってるんだ？

ちよ、ちよっとお待ちなさい！

終わりました、って侍女さんがいうのでとりあえず頭を触つてみた。

……これは！ お隣のヨノ君の髪の毛の感触に似てる！ ツンツンした感触じゃなくて、やわらかい感じのやつ！ ヨノ君に会うたびに頭撫でてるよ！

じゃなくて！ え、じゃあ切られた髪ってあたしの？ これもう男子並みの髪の毛じゃないの？ なんでなんで！？ てかあたしの髪の毛切ってたんだ。でもあたしの髪の毛は金色じゃないよ？ 茶色だよ？ でも落ちた髪は金色。なんだよ、説明がつかないよ！

どう考えてもわからない不思議現象に、そして次の一言で、すべてではないけれど、ほとんどの謎が解けてしまったのである。

「ミハエルお坊ちゃま。明け方ではございますが、ご就寝なされま
すか？」

——あ。

あああああああ！ 農民にや名前の性別とかわからんから！
てかまさか男子に成り代わるのに女のあたしを使うとは思わんて！
ミハエルって男子の名前だったんですね！

でも、それでもあたしの髪の毛は茶色だよ？

犬っころ、学んだ

朝から眠る、という慣れないことをしつつ、眠気を訴える頭でぼんやりと考える。

侍女さんが言うには、だっしょく薬、を使うと髪の毛が金色になるらしい。ただし、髪の毛が不健康？　っていうか傷ついちゃうので使う人はいないんだとか。田舎育ちのミハエル様ならなんとかなりそうなんだとか。まあ田舎育ちっていうか、自然に囲まれたところ、って言うてたけど、つまりは田舎育ちって言いたかったんだろうね。

で、まあ。

そのミハエル、てかあたしミハエルなんだけど。暫定的にミハエルなんだけど。あたし、は昔金髪だったらしいのであります。そして、男子。

……明日から、あたしは男子か。それじゃあ一人称は俺？　僕？　おら？

最後のはじょーだんだけど。あ、貴族なら私とかもありえるかもね。そうだ、シロ、どこだろ……。

こうしてあたしの長い一日は、幕を閉じる。

大きな、光……。あれ……？　薄く開けた視界から感じる、まぶしいほどの光。

あたし、まだ水やりしてないのに、もうこんなに日が昇ってる！　？　そんなことをしたら何かが枯れてちよつとした大変うがあああ！　イズにえさも上げてない！　ミノセとかテノテノとかがやってくれているとうれしいんだけどそんなこと言う前に起きろあたし！　自分で自分を無理やり起こし——目の前の光景も、手に伝わる感触も、いつもと違うことに気が付く。

……おはよう、ミハエル。

心の中で呟いて、何かが急激に冷えて、目もさっぱり醒めてしまった。

……はてはて、私めは今から何をすればよいのでござろうなのでしょう。色々混ざった。

まあ待つても始まらないよね。そういえば昼過ぎになっても寝てる貴族の話とか聞いたことないな。汚い大人の事情の話とかはよくあるのにな。

貴族も生活習慣はしっかりしてたりするのかな？ あ、でも酒におぼれる貴族とかは朝起きれなさそうだし……。省いてるだけか。思考がずれてた。とりあえず……部屋を、出るかな？ でも服が下着なんですよ。そりゃ見せるようなところもないけど、肌を出すのはよくないって聞いたことあるもん。でも周りには着るものがございますえん……。

なんとなく音を立てないように部屋のドアを押し開け——目の前に侍女さん達がおりました。……おはよう。

「おはようございます、坊ちやま。こちらが坊ちやまのお召し物でございます」

おめ、おめしもの？ 侍女さんの腕に乗せてあるのは多分服だ。なんかすっごい高級そうな感じの。……つまりは、おめしものって服っていう意味かな？

どうすればいいのかわからず突っ立っていると、侍女さんも同じように動かないのでしずしずと腕を出して服を搔つ攫ってみた。……着ろってことか。にしても長時間あやって腕疲れなかったのかね？

ドアのところじゃべってたのでとりあえず部屋の中に引っ込み——といっても侍女さん達も入ってきたけど——いざ着よう、というところで、服を渡してくれた侍女さんがハッとして服を丁寧に取り上げられた。……えと、なんすか。

どうやら着させてくれるようだった。貴族って何から何まで他の人にやらせるんだね。逆に何から何まで他の人にバレバレってこと

だけど、それはそれで逆に嫌じゃないんでしょうかね？ ……あ、なんか聞いたことあるような気がする。なんだっけ。

隣のおばあちゃんが言うに、確か……、人を人をしてみてないこともあるから、とかなんとか。感じ悪っ。

「坊ちやま。本日の昼食が終わりましたら、マナーなどしっかりと身に着けるための家庭教師をお呼びいたしました」

服を着させてくれながら、つらつらと今日の予定らしきものを言っていく侍女。え、え、何それやれってこと。……まあ、あたしミハエルだもんね。おれみはえる。ぼくみはえる。

「あ、あの」

何か質問は、と訊かれたので、おそろおそろ声を発せば、なんでしょうかと返ってきた。

「白い、狼知ってます？」

「そちらでしたら、知能のある動物のようでしたので、庭に放してあります」

……よく狼を庭に放し飼いしようと思ったな。てか知能ある、つてわかる前は怖いやん。いつ噛みつかれるかもわからんのに、よく知能あるかどうか確かめようと思ったな。確かめようと思った人、ある意味バカですごいな……。……ま、シロは無事なんだし、考えるのもやめるか。

「食堂はこちらです」

はい、ついていきまーす。

侍女さんの後をついて行きつつ、道もしつかり覚える。この家はおっきいね。家の中で迷子とかもあるけるかも。廊下も似た景色ばっかだったけど、廊下の壁にかけてある絵が全部違ったのでそれを目印にした。

印象に残ったのは、広い草原に花が咲き乱れている絵。それはどことなく、タリ草原を連想されてくれたが——絵に、タンポポが咲いていた。その一点が、タリとは違う。

タンポポというのは芝生を持つ家には天敵とも言えよう。綿毛に

なつて繁殖するから、もう迷惑極まりないのだ。

そういえば、タリじゃあタンポポが咲いてるの見かけたことないなー、なんて、意味もないことを考えつつ。

食堂のドアは、開かれる。

ミハエル・コリンズになつてから一日目、終了。名字は家庭教師が「コリンズ家の長男として——」とかなんちゃら言つてたからわかつた。ミハエル・コリンズ。響きは良い感じだよね。

そういえば家庭教師は事情を知っているらしい。まあそうじゃなきゃ困るよね。……ていうか、なんか見覚えがあつたようななかつたような。あたし、たまにその時見たものを昔見たことあるかのように記憶しちゃつて疑似既視感体験しちゃうことあるんだよね。……うーぬ？ ……あ、あたしじゃなくて、僕。

どうやら僕は一人称が僕らしい。字面にすると意味わかんね。とにかく僕は僕です。

マナー、は厳しかった。なんか音を立てるなだとかほんと色々座学、っていうやつは色々勉強させられた。

実は僕文字読めるんだよっだぜっ！ あの村の人は大体大人に教えてもらえます。ふふふ。エノと一緒におばあちゃんから習つてた。まあその点は感心させられたものの、やはり頭はからっぽなので詰め込み教育でした。思想とかも叩き込まれた。貴族の考えってやだね。絶対に染まりたくないよ。

そして思つたことがある。

教育は、洗脳である。

かつこつけてみた。けどその言葉通りだと自分で思う。教育つて、怖いね！

食事については文句なし、じゃなかつた。

農民と比べるなつて話だけど、やっぱ豪華だつた。でもあたしの

舌が貧しいっていうのか、逆にそんなおいしくなかった。おばあちゃん特性野菜炒めが食べたくなってきた！。

侍女さん達について。

なんか、お父様、つちゅーか旦那様を怖がってる傾向にあるようだ。おしゃべりな侍女さんがそう言ってた。本人は否定してたけど、怖がってるっぽかった。

……村が、恋しいよ。

あの村で生きて、あの村で死んでくのが幸せっていうのが、あの村の考え。あ、これもあるいみ教育の洗脳だね。

言い方悪いけど、洗脳されたおかげかあた、じゃなくて僕もそう思ってる。あー一人称直さないと。

ある意味洗脳って幸せかも？ ま、いいや。

だから、こうやって村の外で過ごす——少し、背徳感がある。

しかも、王宮から逃げた時よりも、よっぽど。

愛国心がないわけでもない。でも、なんか村を裏切ってる感じの方が、いやだ。フはあ……。かえりたーい。

ここに居るのは不可抗力であり、決して自分で来たのではないのだ。自分に言い訳をして——どこか、村から出たい自分がいることに、不快だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5404t/>

犬っころと騎士

2011年7月14日03時21分発行